YOKOHAMA HISTORY MUSEUM NEWS

横浜市歴史博物館

NEWS 8
1999・3

◇いんたびゅー／高村直助「史料が意外なところで見つかるのも楽しみ」
◇特別展「幻の宮　伊勢斎宮－王朝の祈りと皇女たち－」
◇<研究余話>都筑区と都筑郡と「つつき」
◇収集・収蔵資料の紹介〔10〕荏田宿まねき看板
◇<常設展示室探検>展示解説ビデオ
◇<史跡散歩>旧東海道神奈川宿周辺
◇ちょいとミュージアムショップたいむ
◇<知ってますか？>復元住居車椅子見学デッキ

富士三十六景　武蔵野毛横はま　（初代広重、江戸時代）

いんたびゅー

史料が意外なところで見つかるのも楽しみ

フェリス女学院大学教授
高村直助（たかむら・なおすけ）

私が大学生のころは、「日本の国家や社会を歴史の中でどうとらえるか」という関心が、一般に強くもたれていて、日本の近代や資本主義について、よく議論される時代でした。ところが学問的には、前近代の歴史研究と比べて近代、その中でも経済関係の研究はあまりにも遅れていると思いました。それで、史料を探ったり理論を組み立てたりして、なおざりにされている部分を自分で埋めたいと考えたのです。

変化が激しいから面白い

◎横浜市史の編集などを通じて関わっている横浜の近代史には、どんな魅力がありますか。

横浜の歴史は変化が激しい。そこが、研究していて面白いところです。一方で、横浜は関東大震災や空襲にあって、歴史の史料はあまり残っていない。ところが意外な、遠いところから史料が出てくるのです。例えば、日本初の日刊新聞『横浜毎日新聞』の創刊号は、長く見つからなかったのですが、その現物が群馬県の旧家から発見されました。こういう楽しみもあります。横浜の存在自体が全国的で国際的ですから、思わぬところから出てくるわけです。私は特に、貿易に関わる人や事柄に興味があります。横浜には、いろいろな土地から人が出てきていますから、人の行動も横浜だけで閉じていないのです。例えば、横浜の商人が国許と手紙をやりとりして、それがその土地に残っている場合などがあります。その手紙を読むと、やりとりしている間に、横浜でどんどん変化が起きているのが分かったりする。そういうものを読むのが面白いのです。

学問の総合性を求める

◎博物館活動と歴史学の関係についてどう考えますか。

歴史学は、私たちの世代までは、発展の過程で分業化していきました。この人は政治、あの人は外交、私は経済というように。それより一時代前には、一人の学者が何でも手がけていましたが、それでは不十分だということで、どんどん分かれていったのです。それが今、反省の時期に入っていると思います。つまり、現実は分割されていないわけで、ある人間が政治にも経済にも、外交にも関わるかもしれない。専門の側だけからのぞくのでなく、いろいろな側面から見なくてはいけない、といわれる時代です。博物館では、現実にそういうことが求められてきましたし、今や研究をリードする場所になりつつあるという気がします。かつては、学者が調べたことを、かみくだいて示すのが博物館で、学者は博物館を指導・監督するのだと、学者の側で考えていましたが、今、かなり逆転しているように思います。例えば、博物館で展示する〝もの〟を学問的にどう分析するか、と尋ねられて「私の専門はこれだけだから」ではすまなくなっている。博物館の側から、学問の総合性を求めてきているのです。そういう意味で、これからの歴史学にとって、博物館の役割は非常に大きいと考えます。

高いレベルの多様な企画を

◎当館への要望を聞かせてください。

この歴史博物館も、同じ財団が運営する横浜開港資料館も、専門職員のレベルが高い。史料を発掘し調査し、整理し分析し研究する、ということのできる専門職員が大勢おられます。一方、横浜市民には多様でレベルの高い文化的欲求がある、と感じています。それに対応できる力があるのですから、高いレベルでのいろいろなプランを、もっと考えてもいいのでは、と私は思います。具体的な内容は、工夫がいるでしょうが。また、ここのように野外施設をもっている博物館は少ないので、この特色をもっと活用して、多くの方がたが積極的に来館されるようなことを、検討した方がいいと思いますね。

◎歴史に関心をもったきっかけは何ですか。

高校生の時、邪馬台国はどこにあるか、ということに興味をもったことです。あの話にはなぞ解きの魅力がありますから。歴史に関心を持つきっかけが邪馬台国、という人は多いでしょう。しかし結局、邪馬台国は研究しないで、近代史に取り組むことになりました。ただ、時代が古くても新しくても、史料を探り、仮説を立て、それを実証するため、史料と対話しながら検討していく、ということは同じです。

◎日本の産業資本の発展など、近代の経済史にこだわるようになったいきさつは。

▽たかむら・なおすけプロフィール

●一九三六年、大阪市生まれ。一九五九年、東京大学文学部国史学科卒業、一九六五年、同大大学院博士課程単位取得退学。横浜国立大学経済学部助教授、東京大学文学部教授を経て、現在フェリス女学院大学国際交流学部教授。専攻は日本近代史。経済史の立場から一貫して日本産業の特質を追求してきた。また一九六四年から『横浜市史』の編さん事業に関わる。現在は横浜の現代史を扱う『横浜市史II』の代表編集委員。横浜市港北区在住。

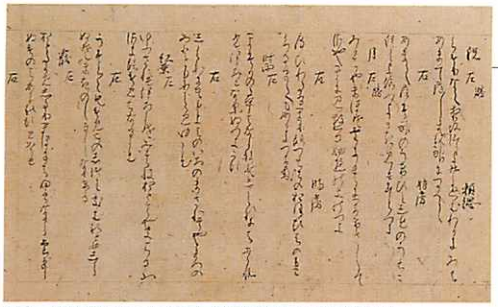
●著書　『日本紡績業史序説』上・下（塙書房）『日本資本主義史論』（ミネルヴァ書房）『近代日本綿業と中国』（東京大学出版会）『再発見　明治の経済』（塙書房）『会社の誕生』（吉川弘文館）

特別展

幻の宮 伊勢斎宮

―王朝の祈りと皇女たち―

期間　一九九九年三月一七日(土)～五月五日(水・祝)



国宝　類聚歌合(二十巻本)第八巻(財・陽明文庫蔵)

飛鳥時代から南北朝時代までの約六六〇年間、新しい天皇が即位すると、天皇に代わって伊勢神宮に仕える皇女が、天皇の娘である内親王または女王から占いで選ばれました。これが斎王です。選ばれた斎王は、「聖なる女性」として、都を遠く離れた伊勢の地で、ひたすら身を浄め、神に仕えたのです。

斎王、斎王の暮らした「斎宮」、それを支えた機構などに関しては、現存する資料が少なく、謎に包まれてきました。しかし、「斎宮」の跡の発掘調査が一九七一年に開始され、継続的な調査が行われたことにより、在りし日の斎宮の姿が徐々に明らかになってきています。

今回の展覧会は、三重県の斎宮歴史博物館がこれまでに蓄積してきた諸資料、過去三〇年間にわたって蓄積した国史跡斎宮跡の発掘調査成果をもとに、〝斎宮〟が最も華やかであった平安時代に焦点をあて、王朝文化の華やかさを導入しながら、斎王として生きた気高き女性たちの歴史、斎王・斎宮の変遷、最新の発掘調査成果や資料を紹介するものです。

神に仕えた「聖なる女性」である斎王に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

土佐光起画三十六歌仙図屏風(斎宮歴史博物館蔵)

〈展示構成〉

第Ⅰ部　王朝の美

第Ⅱ部　斎宮とは何か―制度と年中行事―

第Ⅲ部　歴史に残る斎王たち

第Ⅳ部　よみがえる幻の宮

〈主な展示資料〉

重要文化財　源氏物語写本(財・古代学協会蔵)・源氏物語画帖(個人蔵)などの源氏物語関係美術資料。

国宝　類聚歌合(財・陽明文庫蔵)・西宮記(賀茂別雷神社蔵)・重要文化財　春記(国立歴史民俗博物館蔵)・伊勢物語絵巻・土佐光起画三十六歌仙図屏風(斎宮歴史博物館蔵)などの斎宮の制度や暮らしを伝える文献や美術資料。

国史跡斎宮跡から出土した様々な考古資料など約一〇〇件。

〈講演会〉

四月二五日(日)午後一時三〇分より

永井路子氏(作家)

「歴史の中の女性・伊勢斎王」

料金　無料　定員　当日先着二〇〇名

(受付は一二時三〇分より)

緑釉陶器大壺[国史跡斎宮跡出土](斎宮歴史博物館蔵)

主催　横浜市歴史博物館／斎宮歴史博物館／朝日新聞社

共催　横浜市教育委員会

後援　文化庁、三重県

●観覧料

区分	特別展	常設展・特別展セット
一般	500円(400)	700円(560)
大・高	300円(240)	400円(320)
中・小	100円(80)	150円(120)

(　)は20名以上の団体料金

研究余話

都筑区と都筑郡と「つつき」

―現代と古代を結ぶもの―

一 横浜市の区名

一八八九（明治二二）年に市制が施行された横浜市には、現在一八の区がありますが、それらの成立（施行）時期と区名の由来をまとめると表のようになります。この由来をみると、おおよそ「ア 市内での位置によるもの、イ 区域の中心となる地名によるもの、ウ 区域の特色や願望によるもの」に分けることができます。また、区名の選定は一九六九（昭和四四）年一〇月一日以降は、一般から公募した複数の候補の中から選定する方法が採られています。その結果として「ウ」が多く採用されていますが、候補の段階ではほとんどの場合「イ」も挙げられています。このことはそれぞれの区域で、歴史を反映した地名に強い愛着を持つ住民が少なくないことを示すものといえましょう。

そこでここでは横浜市歴史博物館がある都筑区を取り上げ、その由来を少し詳しく調べて、そこから汲み取れる話題を探ってみます。

二 新しくて古い「都筑」

都筑区は港北ニュータウンの建設に伴い、港北区と緑区から分かれて新設された最も新しい区の一つです。区名選定の理由は、「区域全体を含み、広く区民にも定着している歴史的に由緒ある地名を、将来に向け大切にしたい」「奈良時代から続く歴史のある地名にちなみ、これからの街づくりが、新しい『都を筑く』という区民の総意で進むことを願って」とされています。現在の横浜市域は、近世の武蔵国橘樹郡・都筑郡・久良岐郡と相模国鎌倉郡にまたがっていますが、一九三九（昭和一四）年に横浜市に編入されるまでこの区域は都筑郡に属していました。この区名の選定は、失われた地名を復活させるものでもありました。表でくらべても分かるように、これは「イ」の中でも歴史への認識の強さがきわだっており、「ウ」も含むものでした。

この「都筑」が記録に見えるのは、『万葉集』に載る七五五（天平勝宝七）年に筑紫諸国に派遣される防人が詠んだ歌の、一首の作者を「都筑郡上丁服部於田」と注記するのが最初です。奈良時代には成立していた地名であることは明らかで、他の区名とくらべて最も古くまで歴史をさかのぼることができるものです。少し後の史料ですが、平安時代の九三〇年頃につくられた百科辞書である『和名類聚抄』を見ると、武蔵国を構成する二一郡の一つに「都筑」があり、万葉仮名で「豆々岐」と読みがつけられています。これにより「つつき」と呼ばれていたことがわかります。同書によると山城国（現在の京都府の一部）の「綴喜」郡も「豆丶岐」と読まれており、同じ「つつき」が異なる漢字で書きあらわされています。どうしてなのでしょうか。

●横浜市域と郡（古代）

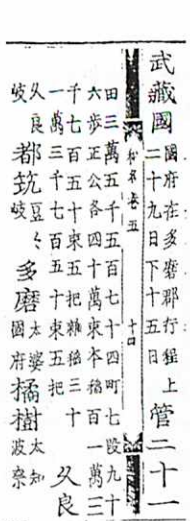
三 「都筑」の選定

奈良時代の初め、七一三（和銅六）年に政府から「諸国の郡郷名は好字で著せ」と、それまで一定していなかった郡郷名の表記に「好字」を当てることが命じられました（『続日本紀』）。これによって漢字二字での表記が定まり、「つつき」の音に当て字した「都筑」や「綴喜」が公式なものとして選定されたと考られます。では「好字」とは、具体的には何を指すのでしょうか。それにはこの命令に続く記事から、吉祥や理想を示すものと合わせて、それぞれの郡内の産物や自然景観の特色、また古来からの地名伝承などが参考にされたと推定できます。これが地域によって異なる漢字が当てられた、第一の理由にあげられます。命名と使用文字との違いや、選考方法の違いはありますが、現代の区名の選定とよく似ています。

この二文字は「都＝都賀郡（下野国）・都家郷（武蔵国比企郡など）」、「筑＝筑紫（筑前国）・筑後国）・筑摩郡（信濃国）・筑陽郷（出雲国意宇郡）」のように、古代の地名に多く採用されており、人々に好まれたものであったことが分かります。そこで「都筑」の文字が当てられた由来を考えてみましょう。『大漢和辞典』などによると、この二文字の音と意味には次のものがあります。

都（と・つ）　天子が居住する場所・行政区画の名・聚まる・すべて・大きい・盛ん・みやびやか・美しい

筑（ちく→つき）　琴に似た楽器・川の名（中国湖北省の竹山県に発する筑水）


武蔵國
國府在多磨郡行程上管二十一
二十九日下十五日
知名卷五
十四
田三萬五千五百七十四町七段九十
六歩正公各四十萬束本稲百一萬三
一萬三千七百五十束五把雑稲三十
久良
都筑豆々岐
多磨太婆國府
橘樹太知波奈
久良岐

「都筑」の読み方（『和名類聚抄』）

都筑郡
餘戸　店屋　驛家　立野（多知乃）　針坪
（爵佐久）高幡（多加波多）幡屋（波多乃也）

都筑郡の郷（『和名類聚抄』）

華やかであり、歴史的由緒を感じさせるものです。これらのどれが適用されたのか、残念ながらこれを示す史料はありません。そこで私なりに可能性を考えてみました。それはこの郡域を流れる鶴見川とその支流を、『漢書・地理志上』など中国の古典に見える筑水（川）に見立て、その一帯が都のように繁栄することを願ったものではないかということです。産物としての竹や景観としての竹林が、その動機であったことも想像できます。

四　古代の都筑郡

それでは古代の都筑郡は、どんな様子であったかを史料で見てみます。『和名類聚抄』によると、郡は現在の大字に相当する「余戸・店屋・駅家・立野・針坪・高幡・幡屋」の七つの郷で構成されていました。当時としては中規模の郡です。その政治の中心となる郡家（郡役所）は、すぐ隣接する青葉区荏田西にある長者原遺跡がその跡とみられます。ここでは多数の掘立柱建物が並んでおり、「都」と墨書された土器が出土しています。郡内には京と関東地方南東部を結ぶ駅路が横断し、九三〇年頃に作られた法規書である『延喜式』によると店屋駅が設けられていました。これは駅路沿いに約一六キロメートル毎に置かれ、馬を常備した施設の一つで、名称からして店屋郷にあったと思われます。この駅の周辺には建物が建ち並び、役人や使者、様々な品物が行き来し、最新の情報が交換される流通と通信の拠点でした。また同書によると、郡内には奈良時代後半から平安時代初めに武蔵国内に置かれた四つの勅旨牧の内の、立野牧と石川牧もあったようです。ここでは監督官のもとで多数の馬が飼育され、毎年朝廷に五〇頭の良馬を納めていました。その中でも立野牧は二〇頭を出しており、国内で最大の牧であったとみられます。これらの牧には、事務所や宿舎、厩舎や鍛冶場、秣場や水場などが設けられ、いわば技術センターとなっていました。残念ながらこれらの駅や牧の遺跡は見つかっていませんが、鎌倉時代の一二五四年に作られた『古今著聞集』に「武蔵国の住人つつきの平太経家は、高名な馬乗馬飼なりけり」と見えるのは、こうした前代からの地域の伝統が根づいていたことを示すものといえるでしょう。

五　「つつき」とは

ところで「都筑」と「綴喜」の漢字と音の関係をくらべると、前者は「つ・つき」ですが後者は「つつ・き」となります。これは「綴喜」が、『古事記』では「筒木」、『日本書紀』では「筒城」と表記されているのと符合します。残念ながら「都筑」に該当するものは見つかりませんが、選定の際にそれ以前の地名の音と意味とが忠実に反映され、その結果異なる漢字が当てられた可能性が第二の理由にあげられます。

これは七一三年以前にあった呼び方である「つつき」の意味は何かという、根本の問題につながってきます。たとえば「つき」は、「みつぎもの＝調」・「土器の一種＝坏」・「けやき＝槻」などの意味をもち、これと接頭語の「つ」との組み合せとも考えられるわけです。いくつかの推測ができますが、これもまだ有力な答えは見つかっていません。それには古代の地名全体の研究を通して、一定の基準があったかなかったかの判定が必要だからです。これは簡単にできるものではありませんが、その基礎となるのはこうした具体例の検討の積み重ね以外にないことも事実です。今後は、次第に明らかにされつつある遺跡と遺物のあり方、木簡・漆紙文書・墨書土器など新しい文字資料の発見、さらに伝承や古い生産用具からの推定などと組み合わせた研究が重要になると考えます。そして当館が進めている地域を踏まえた調査研究などの活動は、まさにそれにふさわしいものといえます。

（前沢和之）

〈参考図書〉
・横浜市歴史博物館『常設展示案内』一九九五年
・横浜市市民局『横浜の町名』一九九六年

「都」の文字が書かれた土器（長者原遺跡出土）

●表　横浜市の区名

区名	成立（施行）年月日	区名の由来と区分		区名	成立（施行）年月日	区名の由来と区分	
鶴見	1927(昭和2).10.1	区中央の鶴見町から	イ	金沢	1948(昭和23).5.15	地域の古称である金沢から	イ
神奈川	1927(昭和2).10.1	区中央の神奈川町から	イ	港南	1969(昭和44).10.1	市域の南部にあることから〈公募〉	ア
中	1927(昭和2).10.1	行政的に市の中央であることから	ア	旭	1969(昭和44).10.1	朝日が昇るような将来性から〈公募〉	ウ
保土ヶ谷	1927(昭和2).10.1	宿場である保土ヶ谷から	イ	緑	1969(昭和44).10.1	緑を美しく保存したい願いから〈公募〉	ウ
磯子	1927(昭和2).10.1	区の中心である磯子から	イ	瀬谷	1969(昭和44).10.1	区内にある古い地域名の瀬谷から〈公募〉	イ
港北	1939(昭和14).4.1	横浜港の北側にあることから	ア	栄	1986(昭和61).11.3	未来に向けて栄えることを願って〈公募〉	ウ
戸塚	1939(昭和14).4.1	宿場である戸塚から	イ	泉	1986(昭和61).11.3	若い力を生み出し発展を願って〈公募〉	ウ
南	1943(昭和18).12.1	中区の南側にあることから	ア	青葉	1994(平成6).11.6	将来に向けて伸びやかに発展するように〈公募〉	ウ
西	1944(昭和19).4.1	中区の西側にあることから	ア	都筑	1994(平成6).11.6	歴史的に由緒ある地名を大切にして〈公募〉	イ

荏田宿まねき看板

江戸時代も後期になると、庶民にも時間的・経済的余裕が生まれ、寺社を中心とする各地の参詣地に出かけるようになります。参詣地としては伊勢や熊野が有名ですが、近くて気軽に行けることから、大山や富士山、鎌倉、江ノ島など近郊名所地にも江戸庶民は多く訪れました。名所地に向かう街道筋には旅人相手の旅籠屋ができ、旅人は旅の疲れを癒しました。

江戸と相州矢倉沢峠を結ぶ矢倉沢往還は途中に大山があることから、大山街道とも呼ばれ、大山や富士山の参詣人でにぎわいました。大山街道沿いの荏田宿には柏屋（現青木正一家）という旅籠屋がありました。十数年前にこの柏屋の古い土蔵から、かつて柏屋にかけられていたまねき看板がまとまって見つかりました。当時の寺社参詣は、講を組みその代表が詣でる代参という形が一般的で、これらの看板は江戸在住の講員達があつらえ、代参者が柏屋に宿泊する度に入口の壁などに掲げたものです。おそらく旅の目的や講中の表示を兼ねたものと思われます。

看板は大山講関係が三〇枚、富士講、愛染講などが一二枚の計四二枚です。もっとも多い「大山御神酒講」など大山講関係が大部分を占め、これらは六月と七月に制作されているものがほとんどであることから、大山の夏山詣りに際して新調されたことがわかります。

制作年の記録があるものでは、大山講関係の文化三年（一八〇六年）、富士講関係の享和三年（一八〇一年）がもっとも古く、最も新しいものは大山講の文久二年（一八六二年）です。この年記から江戸庶民の大山・富士参詣が一九世紀初から本格化したことがうかがえます。

講の所在は市谷、牛込、四谷、麹町、渋谷、広尾、代田、駒場、高田、中野、小松川、板橋、麻布、戸越など江戸全域が確認でき、中には「若者講中」や「魚講中」「鳶中」「木挽中」など職業の講、また「く組」「こ組」「て組」「ふ組」「や組」などの火消し組の講のものも見えます。

これらのまねき看板は大山講や富士講の江戸での広がりを示すとともに、荏田宿の往時のにぎわいを想像させる貴重な資料群です。平成七年には横浜市の指定有形民俗文化財に指定されました。現在は横浜市歴史博物館に寄託され、博物館にその主なものが展示されています。

〈参考〉『横濱の文化財』第四集

常設展示室探検

展示解説ビデオ

博物館を訪れるみなさんは展示物を見て、さまざまな知識を得たり、感性を揺さぶられたりします。それは展示物が、見る者に無限の情報を発信しているからです。しかしながら、展示物が発信する情報のうち、展示する側の意図にそった情報を、より深くまた正確に来館者へ伝えようとする場合、ある程度の補助が必要となります。

その補助具が常設展示室の各部屋にある展示解説ビデオです。

解説ビデオは原始Ⅰに三つ（「石器を作る」「土器の誕生」「海岸線の移り変わりと貝塚」）、原始Ⅱに一つ（「弥生時代から古墳時代へ」）、古代に二つ（「横浜の古墳」「武士の出現」）、中世に一つ（「中世六浦の世界」）、近世に三つ（「名主の語る村」「旅と信仰」「神奈川湊と海上交通」）、近代に一つ（「おばあちゃんの時代」）用意され、ほとんどが五分程度で見ることができます。その内容は、展示物または展示室では伝達しにくい情報で構成されており、ビデオ鑑賞後に再び展示物を見ると、また違う見方ができるようになります。

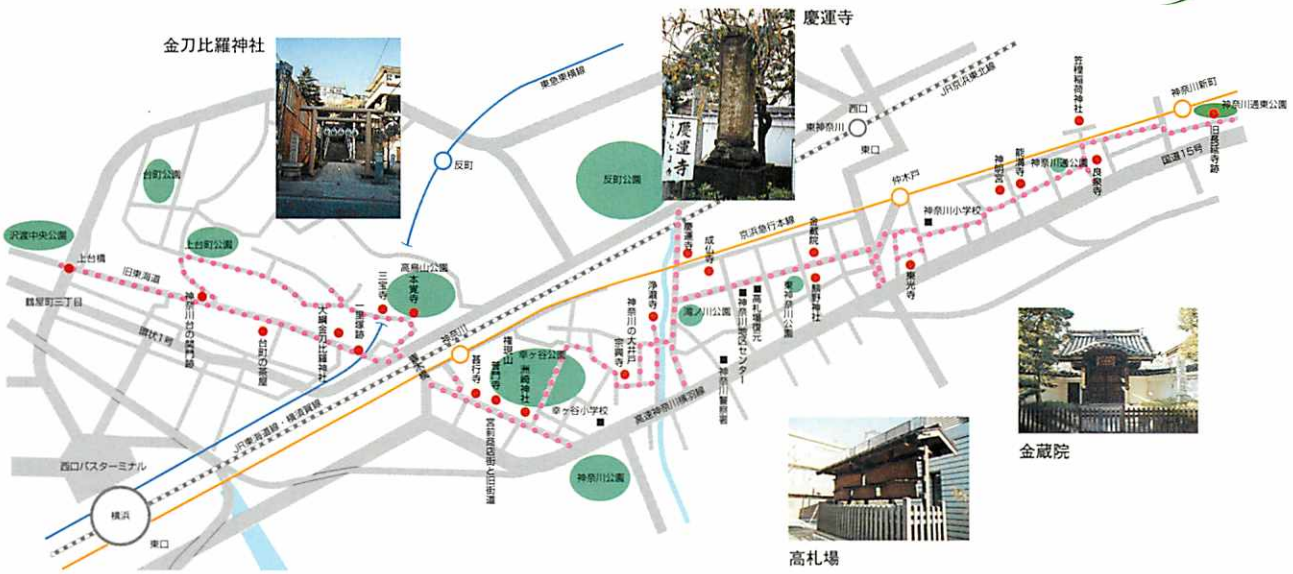
史跡散歩

●旧東海道神奈川宿周辺

江戸時代、市域の東海道には神奈川、保土ヶ谷、戸塚の三つの宿場が置かれ、神奈川宿はこのうち最大の宿場として栄えました。また幕末には横浜開港にともない、外国の領事館などが宿場の寺に設けられました。旧神奈川宿周辺は、神奈川区役所によって、「神奈川宿歴史の道」として整備され、道路には神奈川宿の歴史や伝説を残す史跡にガイドパネルが設けられています。まずはこの「神奈川宿歴史の道」に沿って散歩することをおすすめします。

ルートは上台橋を出発点として、京急神奈川新町駅近くの神奈川通東公園までの約四キロの行程です。上台橋からは登りで、途中に神奈川台の関門跡があり、関門跡を過ぎると台町となります。当時台町の右下はすぐ海で、海側には多くの茶屋が軒を連ね、東海道有数の景勝地でした。坂を下る途中に大綱金刀比羅神社、この神社と歌人弁玉ゆかりの三宝寺の間に一里塚がありました。下りきるとアメリカ領事館にあてられていた本覚寺の山門前となり、国道一号とJR線により旧街道はいったん途切れますが、青木橋を渡り、宮前商店街に入ると再び旧街道の道筋となります。フランス公使館となった甚行寺、イギリス士官の宿舎であった普門寺をへて、商店街の中央には青木町の鎮守洲崎神社があります。この神社の前は当時渡船場で、開港後は開港場へ人を渡しました。洲崎神社の裏手に幸ケ谷公園があり、このあたりが戦国期の古戦場権現山でしたが、台場や鉄道用地の埋めたてにより削られ、現在は山の形状を留めていません。

幸ケ谷公園から少し下ると大井戸とヘボンの施療所として有名な宗興寺があります。商店街は国道一五号につきあたりますが、この国道が旧街道と重なります。国道を東京方面に進み滝の川、この辺りが宿場の中心で本陣などがありました。滝の川を左折し京急線ガードをくぐるとフランス領事館にあてられた慶運寺、この寺は浦島寺としても有名です。慶運寺から少しもどり、滝ノ川公園手前で右折するとすぐにヘボンが住んだ成仏寺、まっすぐ行くと地区センターがあり、隣に高札場が復元されています。神奈川町の鎮守熊野神社、金蔵院を過ぎると京急仲木戸駅前に出ます。いったん国道に出て東光寺をまわり込み、また国道の脇道を行き、神明宮、能満寺を過ぎ、突き当たりを左折し、京急線ガードをくぐると笠稙稲荷神社、境内にある大型の板碑は市の指定文化財です。国道までもどり、すぐに良泉寺の山門、良泉寺をまわり込み京急の線路沿いを行くと京急神奈川新町駅です。駅の近くには神奈川通東公園があり、ここはオランダ領事館がおかれた長延寺の跡地、そして「神奈川宿歴史の道」の終点です。



お寺などは原則的に墓参者以外の境内立ち入りを禁止しています。見学の際は事前に許可を得るなど史跡散歩のマナーは必ず守りましょう。

ちょいと ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

「今度の企画展は？なに、たこ？たこって、あのタコ？ああ、揚げる凧。そっかあ、それじゃお正月だし、ミュージアムショップでは、『たこづくし』でもやりましょうか。」

という訳で一月からは、企画展「たこ凧あがれ」の開催にあわせて、たこづくしフェアを開催しました。干支凧やミニチュアの凧、縁起凧てぬぐい、絵はがき、工作用凧キットなど九品目をそろえました。中でもとても評判が良かったのは、体験学習でもおなじみの横浜の伝統凧「凵子の兎凧」です。博物館特製で限定販売しました。今年の干支のウサギ柄ということもあって、用意していた数がすぐになくなってしまいました。他にもお正月の遊び、福笑いやオリジナルグッズの東海道遊歴双六なども人気のあった商品です。

ミュージアムショップでも企画展のたびに商品の展示替えをしています。期間中しか手に入らない物も多いので、企画展のたびにミュージアムショップにもお立寄りください。

「なに？タコの次はイセ…エビ…サイコウ？」

INFORMATION

今後の企画展のお知らせ

◇開港140周年・条約改正100周年記念展示PART1　開港期・横浜の風景　5月29日～7月4日
　絵図・地図・地誌・浮世絵などから、開港前後期における横浜市域の姿や景観を再現します。

◇海とともに暮らしていた頃－横浜の海と暮らし－（仮題）
7月31日～9月15日
　横浜市域における海岸部の集落の姿を、海との関わりを中心としながら、民俗資料を通じて紹介します。

◇開館5周年記念特別展　秀吉と家康入国（仮題）
10月9日～11月28日
　横浜市域をはじめ関東各地に残る古文書・絵図類や城郭から出土した考古資料などから、豊臣秀吉の東国侵攻や徳川家康の関東入国の意味などを新しい視点をもって紹介します。

??????? 知ってますか???????

復元住居車椅子見学デッキ

博物館に隣接した大塚・歳勝土遺跡公園では、弥生時代の濠をめぐらせたムラと方形周溝墓と呼ばれるお墓が復元されており、弥生時代の雰囲気を感じることができます。ここでは竪穴式住居が7棟建てられています。竪穴式住居は地面をだ円形に掘りくぼめ、4本の主柱を建て、カヤを葺いています。地面から床面までは70センチ強あり、出入りには丸木の階段が設けられています。

竪穴式住居の内部はどのようになっているのかしら、どのくらいの広さかしら、夏は涼しく冬は暖かいという内部に入ったらどんな感じがするのかしら。誰でも中に入ってみたいと思います。しかし、大きな段差があるため、車椅子を利用されている方は中に入るのが困難です。これを解決するため、遺跡公園の竪穴式住居の一つには車椅子のままで中を見学できるように金属製のデッキが設けられています。床面を車椅子で歩くことはできませんが、容易に内部の様子をみることができるようになっています。この復元住居の手前には国際シンボルマークが表示されています。また、解説には点字のものが添えられています。

小さなことからの出発ですが、バリアフリーを徐々に押し進めていきたいと考えています。

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間
午前9時から午後5時まで（ただし、入館は午後4時30分まで）
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日
月曜日、祝日の翌日、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料
一般　400円　　高校生・大学生　200円　　小学生・中学生　100円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
◆第2・第4土曜日は、小・中・高校生は無料です。
◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳（療育手帳）」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●インターネットホームページを開設しています。ご利用下さい。
（4月からアドレスが次のようにかわります）
http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/

編集後記

新しく「史跡散歩」のコーナーを設けました。季節も暖かくなってきました。ぜひご活用ください。遺跡公園では、市民ボランティアの方々による解説ガイドが始まりました。数か月にわたる研修を熱心に受けてこられた方々です。今までとはまた違った見学をお楽しみください。

横浜市歴史博物館●日誌●（98年3月1日～99年3月31日）

- 3月1日　3月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「遠い祖先たちのムラを掘る」「古代の輝き－藤ノ木古墳－」
- 3月1日　歴史講座「土器作り教室」（29日まで毎週日曜日連続4回）
- 3月7日　企画展「横浜発掘物語－目で見る発掘の歴史－」開催（4月5日まで、観覧者9，263人）
- 3月10日　社会研修（インターンシップ）の受け入れ（フェリス女学院大学生2名、22日まで）
- 3月25日　＜ふるさと横浜探検5＞戦国の城・国史跡三島市山中城跡を訪ねて
- 4月4日　4月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「横浜の歴史を訪ねて」「日本の書籍・出版文化の歴史」「さくら屋－神奈川宿の茶屋を再現する－」
- 4月11・12日　体験学習「小田原ちょうちんづくり」
- 4月14日　作品展「私たちが作った縄文土器」（5月5日まで）
- 4月25日　企画展「絵図・古文書で探る村と名主－武蔵国久良岐郡上大岡村－」開催（6月7日まで、観覧者19，342人）
- 5月2日　5月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「徳川氏の天下　江戸屋敷のあとをさぐる」「さくら屋－神奈川宿の茶屋を再現する　－」
- 5月3・4日　体験学習「ぞうり編み」
- 5月19日　歴史講座「横浜の民俗」（7月28日まで連続10回）
- 5月23・24日　体験学習「風車づくり」
- 5月28日　＜ふるさと横浜探検1＞鶴見川流域の古墳・横穴墓を訪ねて」
- 6月6日　6月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「開港の息吹　いま甦える－横浜市開港記念会館ドーム復元」「中国青銅器の世界」
- 6月13・14日　体験学習「土偶づくり」
- 7月4日　7月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「大山もうで行き帰り」「再現法隆寺金堂壁画－いまよみがえる白鳳の美－」
- 7月11・12日　体験学習「鶯笛づくり」
- 7月25日　新収蔵資料展'98開催（9月13日まで、観覧者6，971人）
- 7月25・26日　体験学習「土偶づくり」
- 8月1日　8月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「大江戸のあけぼのを描いた男　浮世絵の創始者　菱川師宣紀行」「日本の名宝・狩野派の屏風」
- 8月1日　「夏休み親子れきし教室」（8月30日まで、参加者414人）
- 8月1・2日　体験学習「火おこし体験」
- 8月22・23日　体験学習「まがたまづくり」
- 9月1日　防災訓練
- 9月5日　9月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「大英博物館　中央アジアの美」
- 9月12・13日　体験学習「竹皮ぞうり編み」
- 9月30日　＜ふるさと横浜探検2＞「戸塚宿から藤沢宿への歴史散歩」
- 10月3日　10月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「故宮　第1集神人と共にあり」
- 10月10日　特別展「兵（つわもの）の時代－古代末期の東国社会」開催（11月23日まで、観覧者8，523人）
- 10月10・11日　体験学習「土鈴づくり」
- 10月16日　歴史講座「古文書解読教室－初めての古文書」（12月18日まで毎週金曜日連続10回）
- 10月17日　特別展関連ギャラリートーク「武器と武具」
- 10月25日　特別展関連講演会　福田豊彦「"いくさ"と武具の移り変わり」
- 10月29日　＜ふるさと横浜探検3＞よこはま事はじめ②山手地区
- 11月3日　11月のハイビジョンシアター（土・日・祝日上映）「平安京・再現　－最新科学が探る幻の都」「神々との出会い「佐陀神能」」
- 11月3日　都筑区民まつり・青葉区民まつり出展参加
- 11月7日　特別展関連ギャラリートーク「将門とその時代」
- 11月14・15日　体験学習「まがたまづくり」
- 11月15日　特別展関連講演会　「南武蔵の「つわもの」を探る－考古学資料と文献資料から－」
- 11月21日　特別展関連ギャラリートーク「鉄を科学する」
- 11月26日　＜ふるさと横浜探検4＞金沢周辺の歴史散歩
- 12月5日　12月のハイビジョンシアター（土・日・祝日上映）「世界文化遺産合掌造り」
- 12月13・14日　体験学習「凧づくり」
- 12月25日から27日　くん蒸のため臨時休館
- 1月9日　1月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「受け継がれる江戸伝統工芸」「巨大古墳の謎－前方後円墳が語る古代日本史」
- 1月15日　企画展「たこ凧あがれ－伝統凧づくし展」開催（3月7日まで）
- 1月17・31日、2月7・21日　企画展関連イベント「ミニ凧づくり教室」
- 1月26日　防火訓練（大塚遺跡）
- 1月23・24日　体験学習「紙すき」
- 2月2日　社会研修（インターンシップ）の受け入れ（フェリス女学院大学生2名、13日まで）
- 2月6日　2月のハイビジョンシアター（土・日・祝日上映）「故宮第2集百家争鳴乱世に競う」
- 2月7日　特別講演会　高村直助氏「近代横浜の軌跡－「帝都の関門」横浜－」
- 2月13・14日　体験学習「まゆ人形づくり」
- 2月28日　歴史講座「土器作り教室」（3月28日まで連続4回）
- 3月6日　3月のハイビジョン・ビデオシアター（土・日・祝日上映）「日本地図事始－伊能忠敬35，000キロの足跡－」「東大寺大仏殿昭和大修理総集編」
- 3月25日　＜ふるさと横浜探検5＞国史跡鉢形城跡とさいたま川の博物館探訪
- 3月27日　特別展「幻の宮　伊勢斎宮－王朝の祈りと皇女たち－」開催（5月5日まで）

横浜市歴史博物館ニュースNo.8／1999年3月25日発行
●編集・発行　財団法人横浜市ふるさと歴史財団
●印刷　株式会社神奈川新聞社出版局

横浜市歴史博物館
〒224-0003　横浜市都筑区中川中央1-18-1
TEL.045-912-7777（代表）FAX.045-912-7780